

中川をよくする会（高知県高知市）

－温泉宿泊施設を核とした地域住民によるイベント開催等での地域づくり活動－

一般財団法人国土計画協会顧問・客員研究員 太田 秀也

1. 中川をよくする会の活動

中川をよくする会（以下「会」という）は、高知県高知市（人口310,029人（2025年4月1日現在、住民基本台帳人口））の土佐山地区において活動する任意団体である。

土佐山地区は、高知市中心部から車で約30分の山間地域で、2005年に高知市と合併するまで、土佐山村（1889年に旧10カ村合併で成立）であった地区であり、かつては4000人近くの人口があったが、合併時には1250人程度となり、現在の人口は840人程度となっている。

会は、1996年に結成され、土佐山地区西部の中川地区（旧久万川・東川・中切村の地区、現在の人口は約100人）において、温泉宿泊施設「オーベルジュ土佐山」の整備を核とした集落経営を理念として、イベント開催、地域の環境整備等の活動を行っている。

その活動により、2004年度に地域づくり表彰・国土交通大臣賞を受賞している。

以下、活動の概要を、会から提供された資料等の情報をベースに紹介する。

(1) 活動開始のきっかけ、活動の経緯

－「中川をよくする会」結成から30年目－

地域では昭和40年半ばに小学校が廃校になり、地域をなんとかしないという機運があった。そのような中、1989年の土佐山村立村100年も契機として、土佐山村において地域振興計画を作成することとなり、各地区でも地域の振興について検討することとなった。中川地区では、1989年に中川地区の世話人会が発足し、1990年に中川会を設立し、中川地区に温泉を掘って温泉宿泊施設を核とした地域活性化を行う構想がもたれた。それを受けて、土佐山村において、1993年に「夢産地・土佐山総合振興計画」が作成され、計画の重点事業として中川地区拠点整備が位置づけられた。

そこで、中川地区では事業の具体化のため、1994年に中川開発実行委員会を設立し、先進地域視察、専門家等も加わったワークショップ開催等により、1995年に「中川地区開発基本計画書」を作成し、村に同計画を提出し中川開発の推進を求めた。

村では、取得した土地に、（当時の村の財政規模が約12億円のなかで約11億円を投じて）温泉宿泊施設の整備を進め、1998年7月に「オーベルジュ土佐山」が落成した。また、施設の運営のため、第三セクターの（有）オーベルジュ土佐山が同年に設立された。

これとあわせて、中川地区では、中川開発の支援のため、イベント開催による地域への集客、ガードレール磨きなど地域の環境整備による地域のイメージアップ等の活動を行う地域づくり団体として、1996年9月に「中川をよくする会」が設立された。

会では、「中川清流鏡川ほたるまつり」、「オーベルジュ土佐山誕生祭」、「名月のタベ」、「四季を食する会」、「じいちゃん・ばあちゃん感謝の集い」、「清流鏡川棚田キャンドル」、大学生等の参加による田植え・収穫等のイベントを開催するとともに、地域の環境整備として、オーベルジュ土佐山周辺に山野草による植栽、登山道の整備、草刈り、ガードレール磨き等を行ってきた。

(2) 現在の活動内容

－地域住民によるイベント開催等での地域づくり活動－

地域住民の高齢化等によって、一部の活動は休止し、現在の活動としては、「中川清流鏡川ほたるまつり」、「清流鏡川棚田キャンドル」、大学生等の参加による田植え・収穫等のイベント開催とともに、地域の環境整備の活動を行っている。

また、地域活性化の取組の中であわせて設立された、直売所「とんとんのお店」を運営する（有）

中川開発（1995年設立）、加工食品生産グループである「中川あじさいグループ」（1998年発足）など、地域の関係組織と連携した地域活性化の活動を行っている。

2. インタビュー、現地調査

2025年6月2日にオーベルジュ土佐山において、会の鎌倉寛光・初代会長（写真左）、前田尺成・前会長（写真右）など会の関係者の方々へのインタビュー・意見交換を行うとともに、現地調査を行った。なお、意見交換には、オーベルジュ土佐山、あじさいグループ、高知市土佐山地域振興課の方や、当時の活動に携わっていた方など、10名以上の方の参加をいただいた。



（写真は筆者撮影）

（1）インタビュー

①会の取組について

会の取組の特徴などについて教えてください。

オーベルジュ土佐山を核とした地域づくりが特徴です。中川地区として、オーベルジュ土佐山の整備について、具体的整備計画についても検討し、行政に提案してオーベルジュ土佐山の整備がされました。またオーベルジュ土佐山等の中川開発の支援のために、「中川をよくする会」が結成され、イベント開催、地域環境整備等で集客に役立つようにしています。

計画では、オーベルジュ土佐山の集客が3万人、イベントでの集客が2万人となっていますが、コロナ禍もあり、イベントでの集客は現在は1万人程度となっています。

当会の実施ではありませんが、春に開催される「嫁石梅まつり」にも多くの来訪者がみられます。

②オーベルジュ土佐山について

オーベルジュ土佐山が地域づくりの核ということですが、山間部にこのような質の高い施設が整備されていて、正直驚いたところがあります。整備の経緯などをお教え下さい。

1994年に中川地区で設けた中川開発実行委員

会において、先進地域の視察、ワークショップの開催等により、施設整備について検討を進めました。検討には、高知県内でホテルを展開するオリエントホテルの社長や、地域づくりの専門家、デザイナーも加わっていただきました。その中で、他の地域の温泉施設の経営が順調とはいえない状況があったことから、それら温泉施設との差別化を図る必要があるという点から、より質の高い、地域に調和した温泉宿泊施設として、南フランスの「オーベルジュ」をコンセプトとした施設整備を行うこととしたところです。「土佐山」という地区の名前も、田舎のオーベルジュとあっているという面もありました。

建物は「土佐派」という考え方で、木造を主体とし、土佐漆喰、土佐紙を使用して作られています。客室にはテレビ等を置かず、「何もない」をコンセプトに非日常を体験できる施設として好評をいただいています。



正面玄関



客室棟



バー



客室

オーベルジュ土佐山の運営や経営状況はどうなっていますか。

オーベルジュ土佐山は、高知市から指定管理者として指定を受けたオリエントホテル高知株

式会社により運営されています。

オープンしてすぐ「婦人画報」等に取り上げられ、県外からの宿泊客も多く利用いただき、ピーク時では年間5万人程度の宿泊客（稼働率5割程度）があり、黒字経営を続けてきました。その後、コロナ禍等もあり、宿泊客は減少し、現在では約2万人程度（稼働率2割程度）となっていますが、指定管理の委託料を高知市からいただくず、利用料だけで運営できています。

③取組が継続している要因

会結成から30年目になりますが、取組が長く継続している要因はどのようなことが考えられますか。

オーベルジュ土佐山と連携して活動をしている点、地域の方々の活動への参加・支援・理解が得られている点が大きいと思います。

オーベルジュ土佐山のスタッフの方には、イベントへの参画もいただいています。またオーベルジュ土佐山の会議室を会の会合、活動の場として無料で利用させていただいています。

収入など会の経営はどうですか。

行政からの補助金等は受けておらず、四国電力の土捨て場の草刈りによる収入が年間40万円程度あるくらいですが、基本は会のメンバーのボランティアの活動によっているので、支出はなく、収入はボランティア活動の慰労会などに活用しています。

活動の継続のためには、後継者の育成が重要だと思いますが、その点はどうなっていますか。

会は本年から四代目の会長へと引き継がれています。ただ若い世代の活動への参加が少なくなっている点が課題です。

④取組の効果（地域への効果など）

取組の効果はどのようなものがありますか。

オーベルジュ土佐山を核とし、イベント開催等により、地域への集客が得られ、地域の活性化に寄与しています。地域外の方の地域への来訪があることにより、地域の方の意識向上、地域のイメージを高めようというインセンティブにもなっています。

また、オーベルジュ土佐山では、地域食材の活用が行われており、地域経済にも寄与しています。

⑤活動のなかで生じた課題

活動のなかで生じた課題があれば教えてください。

旧土佐山村が高知市と合併したことにより、

土佐山地区、中川地区の地域活性化について、かつてのような行政による支援・協力が得られなくなった、それもあり住民の力だけでは地域活性化が難しいという意識になった点が挙げられます。

⑥取組の今後の展望（新たな事業展開など）

今後のめざす方向や新たな事業展開の構想があれば教えてください。

地域には、「ゴトゴト石」（数トンもある大きな石にもかかわらず、子どもの力でも押すとゴトゴトと揺れるが、南海地震でも石が落ちなかったことから受験生の願掛け等に人気がある）などの名所があり、それらを活用した新たな観光スポットの整備も検討していきたいと考えています。

⑦地域づくりを行う団体への取組のヒント等となるアドバイス

これまでの取組を踏まえ、地域づくりを行う団体への取組のヒント等となるアドバイスがあれば教えてください。

当時の土佐山村の鎌倉利夫村長が、集落分権、住民自治の時代が訪れる、住民が何もしなければ何も変わらない、自分たちでできることを自分で実行することが必要だ、とよく言われていましたが、まさにそのことが、地域づくりのために重要だと思います。

また、他の地域づくりの団体との交流を深め、他の団体のいい取組事例があれば、そこから学び、組織の活性化を行い、取組の充実を図っていくことが重要と考えます。

(2) 現地調査

オーベルジュ土佐山に隣接する直売所「とんとのお店」に立ち寄ったが、「中川あじさいグループ」が作った田舎ずし、総菜等が販売されているとともに、洗剤等の日用品、地域の特産品も販売されていた。

当日は「ほたるまつり」が開催され、会の方によるホタルの説明が行われるとともに、ほたる見学の小ツアーが開催されていたので、参加させていただいた。会場では、高知大学地域協働学部の学生さんによる子供向けのゲームも開催されていた（あいにく当日は小雨で参加者が少なかったが、直前の土曜・日曜日にはあわせて約600名の参加があった、また本年のほたるまつり期間（9日

間) 全体では約2500名の参加者があったということであった)。



とんとんのお店



ホテルの説明



高知大学の方々

3. まとめと若干のコメント

以下、中川をよくする会の取組のポイントと思われる点をまとめるとともに、若干のコメントをしたい。

(1) 取組のポイント

本誌2024年1月号50項以下において、「地域づくり表彰の表彰事例の整理・分析」として、これまでの地域づくりの取組事例を整理・分析したが、その内容も踏まえ、協議会の取組をみると、以下のようなポイントが挙げられる。

①取組の位置づけ

地域外の者を地域に呼び込むことにより地域活性化を図る「事業活動」(同誌53頁参照)であり、活動のきっかけ・経緯は「新たな企画の提案」(同誌52頁参照)と位置付けることができる。

②取組の継続性

バブル経済期、ふるさと創生事業期等に構想された温泉施設整備による地域づくりがうまくいっていない事例が多いなか、本取組の核である「オーベルジュ土佐山」の運営は継続し、「中川をよくする会」の活動も継続して行われており、地域への集客という地域づくり活動の継続性(会結成から

30年、世話人会からの活動でみると37年)が見られる。

(2) 若干のコメント

本取組は、人口が少なく、財政規模が小さい村において、質の高い温泉宿泊施設(様々な宿泊プランがあるが、一例として夕朝食付大人2名で8万円程度)を、住民団体の提案に基づき行政が整備し、住民団体が協働で地域への集客等の取組を行っている点に特色を有する。

特に、行政が整備した温泉施設の運営がうまくいっていない事例が多いなか、温泉宿泊施設の運営が継続し、地域づくり活動も継続している点で注目される。

あわせて、整備された温泉宿泊施設による地域食材活用での地域経済循環が図られている点や、地域活性化の取組の中で複数の地域組織が結成され、それらの組織が連携して地域活性化の活動が行われている点でも参考となる。

加えて、収入が少ない中、行政からの補助金等を得ず、メンバーのボランティアの活動によって活動を継続している点でも注目されるが、他方で、インタビューでも述べられていたが、住民の高齢化、世代交代によるボランティアでの活動の担い手不足が懸念されるところである。

この点については、関係人口の構築等も含めて検討していくことが望ましいのではないかと考えられ、現在取り組まれている大学との連携の継続・拡充に加え、オーベルジュ土佐山への宿泊者を含めた関係人口の構築の検討も考えられるのではないと思われる。

市町村合併による周辺部の旧市町村の活力が低下している、かつてのような行政の支援が届きづらいという課題が、他の地域も含め多く指摘されている中で、市町村合併による地域への影響を踏まえた地域づくりへの行政のサポート等のあり方についての検討が必要と考えられる。

※本稿の内容は、筆者の見解であり、筆者の属する組織及び地域づくり表彰主催団体としての意見ではないことを申し添える。